２０１５年2月２４日

農的幸福論　藤本敏夫からの遺言　藤本敏夫著　加藤登紀子編　を読んで

著者である藤本敏夫氏は 2002 年に 58 歳で亡くなった。亡くなったその年に妻である加藤登紀子氏が遺稿をまとめるかたちでこの本は出版された。

この本の中の第２章「人間は万物に謝らねばならない」は 1972 年に書かれたものである。学生運動に参加していた藤本氏自身の行動の原点ともいえるこの章は、改めて読んでも鮮烈な内容で、今なお色褪せることはない。

主にその章を中心にして、藤本氏の思想の一端と農的生活・農的幸福論とは一体何かを私なりにまとめてみたい。

類人猿と枝分かれした人類の歴史は 200 万年前からとされているが、人類が地球の環境に、これほどまでに多くの影響を与え始めたのは、その歴史からすると、ごく最近の出来事である。化学物質などによる大気汚染、そして川・海・土の汚染や森林の無秩序な伐採などは、地球的規模で環境を悪化させる原因となっている。

この急激な環境汚染の背景には何があるのだろうか。

人間は自分というものを意識するまでは、全くの自然そのものの存在であった。自己を意識することによって、自分と自然の区別がわかり、道具を発明することによって、飛躍的にその能力を高めることができた。道具は複数の機能を組み合わせることによって、より高度なものになり、それを駆使することによって、人間は食物連鎖の頂点に立った。

200 万年前からごく最近まで、人はいかに食を確保するかが生活の大半であり、睡眠以外の労働のほとんどは食に関わっていた。人間の生活につかうエネルギーの総量は、自然の中の一部として、地球社会の生態系の許容範囲内であり、他の生物種との共存共栄も可能な社会であった。

しかし、それまでの社会を大きく変えたのは、産業革命であった。その根底にあるものは、実験と観察を重視した唯物論に基づいた近代合理主義思想であった。より早く、より大きな生産力を実現するために、機能はさらに複雑な機能を生み出すことによって、より多くのエネルギーを必要とする社会になった。

そもそも農業以外の様々な産業における生産とは、単にある物質からある物質への転換に過ぎない。何かを生産することは、何かを壊すことでもある。

「人間は地球の居候である。」と藤本氏は説く。

人間は地球のありとあらゆるものを利用し尽くしているにもかかわらず、逆に地球に対して何も還元していない。全くの一方通行の関係である。農業の基本である植物は炭酸ガスを酸素に変換することによって生態系に多くの恵みをもたらしている。人間は地球という共存共栄の生態系の中で、自然と対立するだけで地球に何ももたらさないばかりか、様々な種の存続を遮断している。

世界を席巻している生産力思想と資本主義市場経済は、成長を求めてさらに高度な機能を要求し、複雑な分業体制に人間を組み入れて、人間をも単なる機能の一つにしてしまった。労働するということが歯車の一つになってしまい、労働自体が苦痛となり、労働そのものに喜びや生きがいを見出すことは増々難しくなってきている。

藤本氏は労働について、「楽しむために耐えなければならないということを当然のこと思っている。（中略）何かをするために他を犠牲にするという生き方は人間の本然たる生き方ではない。」と述べている。

人類の歴史を振り返ってみると、つい最近まで、日本でいえば明治の初期まで、人々の多くは農民であり、食の生産に関わっていた。精神的にも肉体的にも、植物や土に触れるだけで、ほっとするような安心感をもつのは、過去の長い歴史が無意識にそう思わせるのだろう。

それが今日に至っては、人口の都市への急激な集中により、多くの人々が生産の場から遊離して、いわゆる消費者になってしまった。ただ消費するだけの人々とは、複雑化した現代分業社会だからこそ現れた、虚像ではないだろうか。その存在はとても危うい気がしてならない。

しかし、現実的な視点に立つと、この大量生産・大量消費の社会にあって、消費者の存在は非常に重要である。消費者がお金を使わない限り企業の経営も成り立たない、つまり社会が成り立っていかない。

現代のこの閉塞的で混沌とした社会をいかに変革していくかを考えた時に、その原点となるのが食と農の現場からの視点であった。藤本氏は、生産者と消費者とを生活者という共通の土俵で連携させる社会を模索し、「消費者という概念をいかに生活者という概念へと転換させうるか、ここがポイントだと思います。そしてそこに農的生活が深くかかわってくる。」と説く。

それでは、現代社会における農的生活とはいったいどういうことなのだろう。それは、単に昔に帰れということではない。

藤本氏は、まず農業と農とを分離して考えている。農業は資本主義市場経済の中で効率性と生産性を求められる一つの産業である。一方農は人間の営みのベースにあるもので、農業は農的生活の一側面にしか過ぎないと説く。しかし、藤本氏は産業としての農業を否定はしない。どうしてもそこに頼らないと生きていけないからだ。

「農的生活の復権というのは産業としての農業の復権を目指しているわけではない。生活の農業化、あるいは農業の生活化もっと穏やかな、人々と農とのかかわりの復権である。」

藤本氏は 2002 年に農林水産大臣に『「持続循環型田園都市」と「里山往還型半農生活」を「エコファーマー」と「ウェルネスファーマー」の連携で創出する』の建白書を提出した。ここで言う「エコファーマー」とはプロの有機農業家、「ウェルネスファーマー」とは

新規就農者や趣味として農的生活を楽しむ人を指して言う造語である。

がん闘病中の藤本氏がその建白書を提出した熱き情熱は何だったのだろう。それは、農業を中核に据えた日本の地域社会づくりと農的生活をベースにした生活設計をすることで、地域社会を農工一体の持続循環型田園都市として再構築することや、食と農という生命の原点からの発想で生活の農業化たる里山往還型半農生活を目指す変革への思いだったのだろう。

先日、朝日新聞紙上で「マイファーム」という会社の代表者を特集した記事が 2 ページにわたって掲載されていた。耕作放棄地を農業体験の場に活用し、都市生活者に貸し出しをしている会社だ。代表者は日本の食の自給率の１０％アップを志している 30 代の人で、壮大なロマンと行動の持ち主だ。

その記事を読んで改めて藤本氏の次の言葉がよみがえった。「最終商品は時間と空間、無数の場を提供すればよい、時間と空間にはあらゆる可能性が詰まっている、その時間と空間を使って自己能力を開発していく、そしてその基本にはあくまで農的生活がある。」

藤本氏の遺志は次世代の若き変革者へと着実に伝わっている。